

が執し
て気が
の偏見
です、
えて欲
ります。
(聞き手・高久潤)

イラスト・伊坂 美友

人権と尊厳守れているか



1966年生まれ。関西学院大学教授。著書に「覚醒剤の社会史」「ドラッグの社会学」など。

佐藤 哲彦さん

社会学者

多くの日本人にとって薬物は、「悪いものだから罰すべき」なのだと思えます。理由は関係なく「悪いから悪い」とはいえ、アヘンや大麻は薬として長く使われてきたのがある時期、犯罪とされました。どうしてでしょうか。

例えば1914年にアヘンやコカインが禁止されましたが、19世紀後半の大陸横断鉄道の完成後、大量に失業者となった中国人移民への排斥運動がアヘン禁止に結びつきました。それ以前の典型的な麻薬使用者は中産階級の白人女性でしたが、禁止する動きはありませんでした。また、南部の農園では白人雇用主が黒人を長時間働かせようとコカインを与えていましたが、次第に彼らを脅威に感じて取り締まりを求めたのです。

好景気には必要とされたものの、29年の大恐慌後に不要となったメキシコ人労働者を排斥するための立法でした。つまり、薬物は外国人や移民など「外から来る脅威」の象徴として犯罪とされたのです。米国主導のもと、国際協定で各国が薬物を違法化し、摘発を強化することで根絶をめざしました。しかしこの「麻薬戦争」は効果が上がりず失敗だったと総括され、新たな流れが生まれています。

80年代にエイズが広がった欧州では、「薬物の害」を減じる「ハーム・リダクション」運動を、薬物使用者自身が始めました。何より「命を救う」という発想から、注射器を配ったり、清潔な使用場所を提供したりしました。「薬物をやめればエイズにならない」という訴えでは死者

や賞罰などは、比較的最近になって広まったこともあり、国際的に刑罰によって規制されてきたと言えます。特に日本はシンナーや危険

つまり刑罰は有効どころか害と言えます。アルコールも薬物も「本人の責任で使うもの」であり、薬物の使用は「非犯罪化」すべきだと思います。(聞き手・藤田さつき)

はつながりません。日本も必要な治療や支援が届く社会にするため、薬物施策の切りを切る時ではないかと思

37年制定の大麻課税法は、好景気には必要とされたものの、29年の大恐慌後に不要となったメキシコ人労働者を排斥するための立法でした。つまり、薬物は外国人や移民など「外から来る脅威」の象徴として犯罪とされたのです。米国主導のもと、国際協定で各国が薬物を違法化し、摘発を強化することで根絶をめざしました。しかしこの「麻薬戦争」は効果が上がりず失敗だったと総括され、新たな流れが生まれています。

国連の薬物犯罪事務所が出した2019年版「世界薬物報告」によると、薬物使用者の割合は全人口の5〜6%ですが、依存症などの薬物使用障害は使用者の約1割にすぎません。依存症の人の治療は必要ですが、刑罰を与え

者には依存症なのだから、刑事罰ではなく治療の対象とすべきだ」という論調が出てきています。ただ注意すべきは、薬物使用者が必ずしも依存症ではないという事実です。

「炎上」で地固まる?

私がオーナーを務めるサッカーJ2の「FC町田ゼルビア」の名前を「FC町田トウキョウ」に変えようと、10月にサポーターミーティングを開いて説明しました。会場の模様をYouTubeで配信したら、「炎上」しました。会場の内外から「『ゼルビア』を残して」と反対の声が続々と上がったのです。

これからはチームを成長させようと思っているにもかかわらず、サポーターや地元の方々が離れ、スポンサーを増やすことが難しくなっています。改名は見送りました。改

だが、今ではeスポーツと広がっています。麻雀でもに、Mリーグとその観戦で「雀」を広げていきたいのです。観る雀の盛り上がりを見ることがあります。12月3日六本木の劇場で開いたMリーグパブリックビューイングのチケットが完売したのです。500円もするため、言いがさえ、売れ残ることを覚悟したが、予想を裏切る人気で、もちろん、私も行きましか大スクリーンには、別の場所る4人の選手(Mリーグ)表情が映し出されます。観客がリーチすれば、声をそろえて「危ない、危ない」と悲鳴

(聞き手・中島鉄郎)